

## J. プリーストリーの奴隷制批判

——ダーウィン、スミスとの比較——

松本哲人

### I はじめに

本稿は、ジョーゼフ・プリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) の奴隷制および奴隷貿易に対する批判を検討する。プリーストリーは、酸素や光合成の性質の発見者として自然科学の分野においてよく知られている。その卓越した実験科学の手法は、後世の科学者にも大きな影響を与え、自然科学の進歩に大きく貢献した<sup>1)</sup>。だが、彼の思想はそれにとどまるものではなかった。社会科学分野における彼の言説もまた、様々な側面で影響を与えていた。

プリーストリーの奴隷制批判は、これまでほとんど注目を浴びてこなかった。プリーストリーの奴隷制論を主題に据えたほぼ唯一の論文としては Dick (2005) がある。Dick は、「プリーストリーの伝記作家たちは、社会問題に対する彼の関心を無視し、神学、科学、政治学に集中してきた (67)」と論じ、奴隷制問題に対して今まで注意が払われてこなかったことを批判している<sup>2)</sup>。プリーストリーの思想に非常に大きな興味を示し、著書の中でプリーストリーを大きく扱っている Robbins (1959) や Kramnick (1990) は、彼の奴隷制にまったく言及していない<sup>3)</sup>。また、プリーストリーの思想は、彼が時論的な様々な論考を取り扱ったために、後世の研究者たちによって、一貫しておらず、なんら理論的でないと思われてきた<sup>4)</sup>。しかしな

がら、プリーストリーは奴隷制や奴隷貿易に非常に大きな関心を示し、その批判の論理は徹底的で一貫している。また、奴隷制批判論には、彼の社会経済思想において極めて重要な（以下で触れるような）二つの観点が含まれている。この二つの観点を明らかにすることは、プリーストリーの思想的特質を浮き彫りにするのに有益である。

また、プリーストリーの奴隷制および奴隷貿易批判は、彼の思想において極めて重要な地位を占めている。人は神の被造物であり、すべての人は神の摂理に従うことによって幸福になることができる。そして、そうなるために努力する機会が全ての人に平等に保障されていなければならぬという神学的功利主義思想をプリーストリーはもっていた (松本 2009)。それゆえに、虐げられ、幸福になる機会すらも与えられていない奴隷という立場は、神の意図に反しているので容認することができなかつたのである。奴隷制批判は、彼の神学的功利主義体系を維持するためには必要不可欠であった。

プリーストリーの奴隷貿易批判は、二つの観点から成っていた。すなわち、それまで主流であった人道的な立場からだけでなく、経済的な利益に根拠を置いた合理的 (理性的) 立場からの批判であった。これは人間が生まれながらに持っている権利である自然権に由来する人道的な理想や理念に基づいて現実を批判する観点を

中核に据えつつも、現実の問題を解決するための実践的な実効性を高めるための、現実に即した合理的で具体的な提案であった。この両面を見据えた批判的立場がプリーストリーの思想を特徴づけている。これに着目することがプリーストリーの奴隷制批判を対象とする意義である。とりわけ経済的観点に関して、後に示すように彼はアダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) の『国富論』から経済学的な知識を学び、その知見に基づいて、そのような議論を展開することができたのである。プリーストリーは『歴史および一般的政策に関する講義 *Lectures on History, and General Policy*』の序でスミスの『国富論』に言及し、スミスが「たくさんの価値ある項目」を付け加えたと評価している。この点は経済思想史の観点からしても 18 世紀後期イングランドにおけるスミスの影響力を見るうえで興味深い問題である<sup>5)</sup>。

プリーストリーの奴隷制批判の特徴を明らかにするために、以下のような手続きで議論を行う。まず、当時の奴隷制や奴隷貿易の実体がどのようなものであったかを振り返り、様々な反対運動が展開されていたことを概観する (第 II 節)。こうした歴史的背景に照らして、奴隷制や奴隷廃止論の議論を大きく二つの潮流、すなわち人道的観点と経済的観点に分類し、それぞれを考察する。とりわけプリーストリーが——直接的にせよ間接的にせよ——影響を受けた 2 人の論者、エラズマス・ダーウィン (Erasmus Darwin, 1731-1802) を前者の代表、スミスを後者の代表として論じる (第 III 節)。次にこれらと比較しながら、プリーストリーが奴隷制批判を総論的に論じた『講義』における議論を検討し (第 IV 節)、そして、総論をより拡張して詳細に展開した『説教』における彼の奴隷制批判の論理を検討する (第 V 節および第 VI 節)。最後に、議論の総括として、プリーストリーは奴隷制および奴隷貿易廃止後の社会についてどのように考えていたのかを論じる (第 VII

節)<sup>6)</sup>。

## II 奴隷制と奴隷貿易<sup>7)</sup>

ブリテンの奴隷貿易量は、18 世紀半ばを過ぎるころ、急激に増加し、「他国の追従を許さない奴隷貿易国になった」。1672 年に設立された王立アフリカ会社は、アフリカから西インドへの奴隷貿易を名目上、独占していた。しかし、王立アフリカ会社は、1698 年、ブランコ岬から喜望峰までのアフリカ沿岸での貿易活動を全イングランド人に開放した<sup>8)</sup>。これは奴隷貿易の自由化を意味していた<sup>9)</sup>。その結果、17 世紀の終わりのころ、年平均奴隷輸出数は約 5,250 人であった。だが、スペイン継承戦争後の 1713 年のユトレヒト条約で、スペインから植民地への奴隷供給権 (アシエント特権) の獲得を契機に正式に奴隷貿易に参入し、1740 年代にはその約 5 倍になり、60 年代には約 36,000 人、70 年代には 47,000 人にのぼり、18 世紀の終わりのころには 45,000 人程度に達した。1767 年には、ヨーロッパ全体での奴隷輸出量の 54% をブリテンが占めるようになっていた。

しかし、これほどの奴隷輸出数の上昇は、奴隷貿易の自由化という制度だけでは説明できない。それは商品貿易の拡大と不可分の関係にあった。奴隷輸出数と並んで、ブリテン国内での砂糖輸入額は、ユトレヒト条約が締結された 1713 年から 75 年の間に約 3.4 倍に膨れ上がっている。それだけブリテン国内では砂糖の消費量が増大していたのである。砂糖は植民地の (とりわけ英領西インドでの) 主要な生産物であったが、これらはそのほとんどが奴隷により生産されていた。この砂糖消費の増大 (砂糖輸入の増大) は、植民地入植者たちの購買力水準を引き上げ、奴隷輸入をより増加させるきっかけとなったのである<sup>10)</sup>。他方、この奴隷輸入数の増加は、ブリテンからアフリカへの商品輸出の増大をもたらした。すなわち、18 世紀の砂糖消費量の増大は、最終的にはブリテンの国内産品、

とりわけ工業製品の生産を活発にした。奴隷、砂糖、工業製品（とりわけ綿製品）という商品を基盤に三角貿易が大西洋——ブリテン、アフリカ、英領西インド——で展開されていたのである<sup>11)</sup>。

このような奴隷貿易および奴隷制は、18世紀を通して次第に、非難にさらされていき、80年代後半から反対運動が活発化していく<sup>12)</sup>。とりわけ、福音主義者であったグランヴィル・シャープ (Granville Sharp, 1735-1813)、イングランド国教会派ではあったがクエーカー教徒との交流を持ち、非国教徒たちの社会改革運動に強い共感を示したトマス・クラークソン (Thomas Clarkson, 1760-1846)、クラークソンと手を組んだウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833) の取り組みは知られている<sup>13)</sup>。1787年、クラークソンを中心にロンドンに奴隷貿易廃止協会 Society for the Purpose of Effecting the Abolition of the Slave Trade が設立された。彼らは、奴隷制および奴隷貿易の即時撤廃を求める急進的な路線をとらず、奴隷貿易を廃止した後、徐々に奴隷制を撤廃するという穏健かつ現実的な路線を選択し、議会外での活動と議会内での法制化の要求という2つの方法をとった（後に見るようにプリーストリーは彼らの活動を知っていたし、彼らの路線を継承している）。これらの活動には、奴隷貿易廃止協会によるものだけでなく、民間からの奴隷貿易廃止を求める請願があった。奴隷貿易問題を調査する枢密院委員会が設置される1788年2月までに35件以上、3月末までにはオックスフォード大学、イングランド国教会の数々の教区、クエーカー教徒の団体など100件以上の請願が議会に提出されている。このように「議会外からの次第に増大する請願に対処するかたちでピットによって枢密院委員会が設置され、さらに5月の議会において奴隷貿易問題を次期国会で議論対象とすることが決まったのである」(市橋 1989, 157)。しかし、議会内では、

調査や議論が遅々として進まなかった。反対派議員の抵抗にあったのである。1791年4月に議会内で初めて奴隷貿易廃止動議が出され、結局は否決された。そのような紆余曲折はあったものの、奴隷廃止運動は19世紀に入ると、再度注目を浴び、世論の支持を徐々に勝ち取ることとなる。そして、最終的には、1807年に奴隷貿易禁止法が成立することになる。また、1834年には、解放奴隷を一定期間徒弟とすることや、奴隷の解放に対する補償として総額約2,000万ポンドを奴隷主に支払うことを定めた法が成立し、制度上の奴隷制は、廃止されるにいたった。

### III ダーウィンとスミス——廃止論における二つの潮流——

本節では、人道的見解を表明したダーウィンと経済的観点を打ち出したスミスの議論を順に検討する。プリーストリーはルナ協会 Luna Society を通してダーウィンと親交があった。また最初に論じたように、プリーストリーはスミスの『国富論』から様々なことを学んでいる。それゆえ、彼らの議論はプリーストリーの議論と非常に深く関連性を持つのである。そこでまず、ルナ協会の概要、およびプリーストリーとダーウィンの繋がりを確認しておこう。

#### 1. ダーウィンの人道的奴隷廃止論

ルナ協会は、1766年に、マシュー・ボルトン (Matthew Bolton, 1728-1809)、エラズマス・ダーウィン、ウィリアム・スモール (William Small, 1734-1775) を中心としてバーミンガムに創設された。その名称は当初、満月に最も近い月曜日に会合を持ったことに由来する。参加者は中産階級の研究者や企業家などであり、様々な知識の情報交換の場であった。その知識は、産業革命を推進する原動力となった。参加者の中にはジェイムズ・ワット (James Watt, 1736-1819)、ウィリアム・ウィザリング (William

Withering, 1741-1799), リチャード・ラヴェル・エッジワース (Richard Lovell Edgeworth, 1744-1817), ジョサイア・ウェッジウッド (Josiah Wedgwood, 1730-1795) などがいた<sup>14)</sup>。

プリーストリーは1780年にバーミンガムに移住した。それ以前からルナ協会の参加者とは親交があり、やがてルナ協会に出席するようになった。プリーストリー自身も、ルナ協会から様々な知的な刺激や影響を受けたと回想している。

奴隷制度および奴隷貿易に関してもルナ協会参加者は、様々な形で——ある者は詩や説教の形式で、またある者は論説によって——反対の主張を展開している。ルナ協会内部でも様々な議論が交わされたと推測される。その中でもとりわけ積極的に奴隷制および奴隷貿易の批判を展開したのは、ダーウィンであった。ダーウィンがウェッジウッドとともに反奴隷運動の象徴となるようなメダルを作成していたことはよく知られている。しかしながら、その主張は、従来から主張されていた人道的観点からのものであった。さらに、ダーウィンの主張はプリーストリーの場合と異なり、奴隷制と奴隷貿易の即時廃絶を訴えていることに特徴がある。

ダーウィンは奴隷制や奴隷貿易が人為的な制度によってもたらされていると主張し、非難する。彼はそのような一貫した主張を詩という手段を用い、1789年に二篇の詩集である『植物の庭 *Botanic Garden*』として出版した。彼は、地球という惑星の自助努力では奴隷制を撤廃することはできないし、奴隷を救うこともできないと論じる。それゆえ、ダーウィンは女王をはじめとしたブリテン人たちに直接的に訴えかける。

耳を傾けよ、ブリテン人！ 島の支配力を持つ女王よ、  
彼女の公平な技芸と従順な宗教心ははるか遠方へとってしまった。

いまや、ずる賢い息子たちがアフリカ沿岸を侵略している、

そして、略奪と殺人が貿易の服をまとって横行している！

奴隷は鎖につながれ、ひざまずいて懇願する、  
大きな腕を広げ、汝に目を移す。

白人の欲望が、外傷と抑圧された苦役をもたらし、

『私たちは同志ではなかったのか？』と窒息させられた残りの人々は懇願する。

空気！ 平静な洪水の天国へと連れて行き  
彼らの潔白は声をあげて泣いている！

——大地、それはかれらの血を覆えない！

(Darwin 1789, Part I, 59)

また、『植物の愛 *Loves of the Plants*』の中でダーウィンは、奴隷制および奴隷貿易の廃止を政治家たちに直接訴えている。彼は、奴隷制や奴隷貿易を残忍であると断罪したうえで、それらを容認している政治家たちに対しても同様に、激烈な非難を加える。そして、その即時撤廃を要求する。

今日もなおアフリカの森の中で、忌まわしい  
わめき声をあげて

残忍な奴隷制が忍び寄り、地獄の犬を放つ。

谷から谷へと狩りたてる声がこだまし、

黒い肌の民族はその音に震え上がる！…

傷つけられた人々を公平に扱い、勇敢な人々に報いよ、

あなたたちの強靱な腕を伸ばせ あなたたちは救う力を持っている！…

聞け、政治家たちよ！ この崇高なる真実に耳を傾けよ、

『抑圧に加担するものは、その罪を共有するものである』

(Darwin 1789, Part II, 89-90)

このようにダーウィンは、人道的な観点から

奴隷制や奴隷貿易を非難した。奴隷所有者や奴隷売買者の慈愛心に訴えかけようとしたのである。しかしながら、奴隷の数は 18 世紀を通してほとんど減少しなかった。それは人道的な観点からの奴隷制反対論の限界を示している。

## 2. スミスの経済合理的奴隷廃止論

こうした限界を打破する上で、奴隷を所有することの経済的不利益を説き、奴隷制や奴隷貿易を批判するスミスの議論が意義をもった。スミスの著作における奴隷制に対する言及の多さからも、スミスが奴隷制に対して大きな関心を持っていたことを知ることができる。

スミスが経済的根拠に基づいて奴隷制を批判した理由は、彼のハチスン批判から推測される。ハチスンは——すでに論じたダーウィンと同じように——慈愛心に訴えかけ、奴隷の解放を主張した。そのような慈愛心を人間本性の基礎に置いたハチスンの議論をスミスは批判した。『道徳感情論』において、スミスはハチスンの体系を「慈愛心の体系」として取り上げる。そして、慈愛心だけでは、「慎慮、警戒、細心、節制、恒常性、不動性という下級の徳について」十分に説明を与えることができないと論じる。「儉約、勤勉、分別、注意、思考の集中といった感情は、自己利益への動機から育成される」のである。「不注意や儉約の欠如は、普遍的に否認されるが、しかしながら、慈愛心の欠如から生じるのではなくて、私的利益の対象への適切な注意の欠如から生じるのである」(Smith 1759, 304 / 訳(下)307-08)。それゆえ、スミスにおいては、奴隷を解放することにより、奴隷所有者がどれほど利得を得ることができるのか、という議論へとその力点が移る。その力点の変化は、奴隷制を集中的に批判し、直接的には批判しないものの奴隷貿易をも批判するというを示している。ただ慈愛心に訴えた理念による批判ではなく、奴隷所有者の私的利益を十分に理解したうえでの実践的解決法の提案であった。ス

ミスの見解は『法学講義』や『国富論』などに見ることができる<sup>15)</sup>。

まず、スミスは奴隷制がなぜ生じたと考えていたのだろうか。『国富論』において、スミスは、それを「自尊心」に求めた。スミスによれば、「人間は自尊心があるために、いばることを好む。したがって目下の者を説得するためにへりくだらざるをえないことほど、人に屈辱感を与えるものはない。したがって、法律が許し、仕事の性質上可能でさえあれば、人は一般に自由人よりは奴隷を使う方を好むだろう」(Smith 1776, 388-89 / 訳(二)200-01)。しかしながら、スミスは奴隷による労働よりも自由人による労働のほうが費用は安く上がると信じていた。そして、この論点がスミスの奴隷制批判の中心的論拠になっている。

『法学講義』A ノートにおいて、スミスは、奴隷だけでなく奴隷の所有者にとっても奴隷制を堅持することは不幸であり、とりわけ、後者にとっては不利益でもあると論じる。「奴隷の状態が奴隷自身にとって不幸であることは疑いようがない。これはほとんど証明する必要がある。」他方、奴隷所有者にとっても奴隷を維持することは「不幸」であり、そのことを「証明することは困難ではない。すなわち、奴隷による土地の耕作は、自由人による耕作ほど有利ではない。奴隷の労働によって得られる利点は、もし最初にかかった費用と維持費用から算定すれば、自由人から得られる利得ほど大きくはないだろう」(Smith 1978a, 185)。スミスはこのような観点を一貫して維持した。

スミスは、『法学講義』B ノートにおいて、より詳細に、農業であろうが製造業であろうが奴隷の労働は自由人の労働に比してコストがよりかかることを説明している。「土地が有力者の間で、大きく分割されると、それは奴隷たちによって耕作されるが、この耕作方法は非常に不利益である。」続けて、スミスは、奴隷労働がもたらす「不利益」は労働の動機が「恐怖」

にあることに求められると論じる。それによって奴隷は勤労意欲を失い、改良の手立てを自主的に考えなくなるのである。

奴隷の労働は、処罰への恐怖以外の動機から出るものではない。もし、彼がこれを免れることができたならば、まったく働かなくなるだろう。もしももっとも異常なやりかたで努力したとしても、彼は何かの報酬を期待することはまったくできない。彼の労働の全生産物は主人のものとなるので、彼は勤労への励みをもたない。おそらく若い奴隷は、初めのうちはすこし、主人の好意を得るために、努力するかもしれない。だが、彼はまもなく、それがすべて無駄である、彼の態度がどうあっても常に同じく厳しい取り扱いにあうだろうということを、理解するのである。それゆえ、土地が奴隷たちによって耕作されているときは、彼らは勤労への動機をもたないので、土地が大いに改良されることはありえないのである。(Smith 1978a, 523 / 訳 357-58)

製造業の場合も農業の場合と同様の主張が展開される。奴隷制においては、どのような場合にも、「恐怖」のみが労働の動機であり、それゆえに労働意欲を削がれ、改良が停滞する、というのである。

奴隷制が行われたあらゆるところで、製造業は奴隷たちによって営まれた。それが奴隷たちによって自由人たちによるのと同じようによく営まれることは、不可能であった。なぜなら彼らは、処罰への恐怖のほかには、労働への動機を何も持つことができなかつたし、彼らのビジネスを容易にする機械を発明することも、決してできなかったからである。自分の貯えを持つ自由人たちは、労働を営むのに便利だろうと思うならどんなものでも、仕上げてもらうことができる。もしある大工が、

ナイフよりかんなのほうが、彼の目的に役立つだろうと思えば、彼は鍛冶屋に行き、それを作ってもらうことができる。しかし奴隷がそういう提案をすれば、彼は怠けものと呼ばれて、彼を楽にする試みは何も行われないのである。(Smith 1978a, 526 / 訳 367-68)

総論的に『国富論草稿』においてスミスは、「奴隷たちによってなされる仕事は、つねに、自由人たちによってなされる仕事よりも高価になる」(Smith 1978b, 579 / 訳 487)と論じている。

そして『国富論』において、スミスは、奴隷が最終的にはもっとも「高価」なもの、すなわち費用がかかるものだから、彼らを「自由人」として、すなわち自由な労働者として解放したほうが、賃金などの様々な経費を抑えることができる」と強調している。すなわち、「全ての時代、全ての国家の経験は、奴隷によってなされる仕事は、彼らの生活資料しか賄えないように思われるけれども、結局は、あらゆるものの中でもっとも高くつくことを示していると私は信じている」(Smith 1776, 387 / 訳(二)199)。その具体的な例として、スミスはアメリカ東海岸の事情を以下のように論じる。後に示すように、プリーストリーはこの文を『講義』において引用した。

自由人によってなされる仕事のほうが、奴隷によってなされる仕事よりも結局は安くつくということは、あらゆる時代、あらゆる国民の経験から明らかだと私は信じる。ふつうの労働の賃金があれほど高いボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアでさえもそうであることがわかっている。(Smith 1776, 99 / 訳(一)146)

また、スミスは、奴隷の管理方法に触れ、イングランド人よりもフランス人の方が奴隷の管理が上手であると論じる。なぜなら、統治が自由であれば、国は奴隷所有者に対して管理や統

制ができなくなるので、奴隷は法の下におかれず、管理者からの暴力を受けやすい。他方、専制的な統治をおこなっている国家では、国家が介入してくるので、奴隷は暴力などから保護されやすい。「為政者の保護があれば、奴隷は主人の眼にさほど軽蔑すべきものでなくなり、主人はそれによって奴隷をより尊重し、よりやさしく扱うようになる。やさしい扱いは奴隷をより忠実にするばかりか、よりものわかりをよくし、したがって二重の理由で、より有用なものとする。奴隷はいっそう自由な使用人の状態に近づき、主人の利害関心に対してある程度、誠実に献身的になりうる」(Smith 1776, 586-88 / 訳(三)166-69)。それゆえ、スミスはフランスの植民地は繁栄したと論じるのである<sup>16)</sup>。しかしながら、スミスはイングランドがフランスのようにしなければならぬとは考えていなかった。法による規制よりも自由を維持しなければならぬと考えていたために、奴隷制には徹頭徹尾反対であった。

このようにスミスは、自由な労働者による労働の賃金の方が奴隷労働でかかる費用よりも安く上がることを説得的に論じた。だが、スミスの議論において、人道的な傾向はそれほど現れてこない。以下に述べるように、この人道的な議論と経済的な議論の両方を兼ね備えていたのがプリーストリーの議論の特徴であった。彼は、従来の人道的な議論に経済的な利得に関する議論を加えて、奴隷制廃止論を展開したのである。

#### IV 『講義』におけるプリーストリーの見解 ——人道的見解と経済の見解——

プリーストリーは、1761年から1767年までウォリントン・アカデミーで歴史学講義を行った。その際の講義ノートに加筆・修正し、1788年に『歴史および一般的政策に関する講義 *Lectures on History, and General Policy*』(以下、『講義』と略記)として出版した。本書は様々な版が出ており、アメリカ移住後の1803年版でも

全体的には若干の加筆・修正が加えられ、最終的には1826年にラットによって版の違いや脚注が追加され、出版された(これが今、全集に収録されている版である<sup>17)</sup>)。だが、こうした加筆・修正にもかかわらず、奴隷制や奴隷貿易に対する記述は一貫していた。以下では、『講義』において述べられた奴隷制に関する議論を中心に考察することにした。

『講義』においてプリーストリーは、まず奴隷制の起源を論じる。人間は「基本的には naturally」労働を避けたがる。それゆえ、奴隷制が発生し、古代ギリシャや古代ローマではほとんどの生産が奴隷によって行われてきたのである。近代になり、植民地での労働者を確保するため、奴隷がアフリカで購買され、アメリカへ送られるようになった。奴隷貿易はこの過程で生じたのである。このような奴隷貿易を含む——システムとしての——奴隷制度は、「不当であり邪悪な政策 ill-policy」であるとプリーストリーは断罪する (Priestley 1803, 319)。

プリーストリーによれば、奴隷として虐げられている人の「人間本性 human nature」は、「最も惨め」な状態へと落とし入れられる。奴隷は自分の意志で何かをすることができない。そのために、「動物よりも奴隷の状態は惨め」(Priestley 1803, 319)になるのである。それゆえに、彼は奴隷制度を廃止し、奴隷状態に陥っている人物の「人間本性」そのものを変革する必要性があると考えた。

プリーストリーは続けて、奴隷廃止に関する二つの論説を取り上げる。すなわち、第一に、奴隷は「非常に残酷な取扱い」(Priestley 1803, 319)を受けているから解放する必要がある。第二に、奴隷として労働を課すよりも自由人として労働に対する対価を払う方が安くあがるということである。後者については、スミスからの引用が本論の中でなされている。繰り返しになるが、再度引用しておくことにしよう。「自由人によってなされる仕事のほうが、奴隷に

よってなされる仕事よりも結局は安くつくということは、あらゆる時代、あらゆる国民の経験から明らかだと私は信じる。ふつうの労働の賃金があれば高いボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアでさえもそうであることがわかっている」(Smith 1776, 99 / 訳(一)146)。このように、プリーストリーは、『講義』において奴隷制や奴隷貿易を人道的観点と経済的観点の2点から批判していたのである。

また、奴隷を購入した国家は、兵員を増加することができるので、容易に戦争へと突入することができるようになる。それゆえ、奴隷制を廃止すれば戦争は容易には起こらなくなるだろうし、これまで戦争に動員されるために出産を管理されていた奴隷は、奴隷制の廃止によってより結婚が奨励され、人口の増加を期待することができるだろう。それにより、自由な労働者が生みだされ、生産力が上昇することを、プリーストリーは期待したのであった。自由な労働者の増加は、賃金を一時的には低下させる。だが、生産力はそれとともに分業の促進によって増大するから、最終的には全般的な富裕が達成されることになる。プリーストリーは、富の増進と奴隷制の廃絶が同時に達成できると——いささか楽観的ではあるが——考えていたのである。

プリーストリーは、植民地での奴隷の補充を目的とし、近代において活発に行われるようになった奴隷貿易に関して、奴隷の購買者ないし雇用者に対してそのような貿易を停止するよう要求する。彼らは奴隷の悲惨さから目を背けている。彼らは、一時的には「利得は少なくなるかもしれないけれども」、「できるだけ早く、ほかの方法で」つまり自由人として労働者を雇用すべきだ、という。彼はあくまでも奴隷を精神的・身体的に自由にし、スミスと同じように自由な労働者として雇用する方がよいという認識を持っていたのである。

プリーストリーは、最後に、奴隷制の廃止のモデルケースとしてのアメリカを持ち出し、ク

エーカーや奴隷廃止論者の行為を称賛している(Priestley 1803, 402-04)<sup>18)</sup>。彼は賃金水準の変化を念頭に入れていたが、あくまでも自由競争の方が賃金は安くあげることができるというスミスの主張を踏襲していた。当然のことながら、ミルが論じたように、肥沃な土地をもつ場所ないし地域では、必ずしもそうはならない——つまり、奴隷制の方が費用が安くなる場合がある——という見解には至らなかった(ミル『原理』第二編第五章参照)。ここに、あくまでも「自由」に最高の価値をおき、すべてを自由の基準によって評価するプリーストリーの思想の本質を見ることができる<sup>19)</sup>。

このように『講義』におけるプリーストリーの説明は、非常に概説的であり、詳細にまで立ち入って論じられていない。また、奴隷制と奴隷貿易の関係がどのようになっており、どのような形で廃絶すればよいのかということが明らかになっていない。しかしながら、このような問題についての見解は、後の『奴隷貿易の問題に関する説教 A Sermon on the Subject of the Slave Trade』<sup>20)</sup>(以下、『説教』と略記)においてより明確に現れるのである。

## V 『説教』におけるプリーストリーの見解(1) ——人道的見解——

プリーストリーは1788年にバーミンガムで奴隷制度の反対を唱える説教を行った。その説教に基づいて、加筆された著作が『説教』であった。プリーストリーはこの説教を奴隷貿易廃止通信協会 Committee of Correspondence for abolishing the Slave Trade からの依頼を受け、行った。プリーストリーはある書簡で、クラークソンが中心となり行っていたような国会に対する請願が「よい効果をもつ」ことを望み、「熱意を持ち、全会一致で」奴隷貿易ひいては奴隷制を廃止するように動く必要性を強調している。また、彼は、「金を集めるのではなく、その問題に無頓着であるだろう人々に情報を与える

こと」, つまり, 奴隷貿易によって富を蓄えることは不正義であり, 奴隷貿易から撤退し, 人として正義を為す必要があるということを「私たちすべて」が理解しなければならないと主張するのである (Priestley 1832, 7)。

『説教』におけるプリーストリーの主張は、『講義』と同様, 大きく二つに分けることができる。すなわち, 奴隷制と奴隷貿易を廃絶しなければならないのは, 第一に人道的な理由, 第二に経済的な理由からである。

プリーストリーにとって奴隷制は, 「太陽の下で最大かつもっとも悲しい悪 (Priestley 1788, 381)」である。博愛心を持っている人物であれば, そのような奴隷制に対して反対するはずである。それは人種・国籍・宗教などとは関係のない普遍的な行為である。

あなたは全ての人物を同志として, 隣人として見なければならぬだろう。…人として, キリスト教徒として, 親族や特定の友人, 同国人やヨーロッパ人たちに対してだけでなく, アジアやアフリカやアメリカの苦難に満ちた住人たちに対して, キリスト教徒だけでなく, ユダヤ教徒やイスラム教徒や異教徒に対して, 私たちは関心を払うべきである。そして, 私たちが同胞に対して感じなければならないように, 私たちの影響力を最大にし, 彼らの苦難を取り除くよう努力しなければならない。 (Priestley 1788, 368)

プリーストリーは, 奴隷制や奴隷貿易の残忍性を告発するために, 様々な情報を紹介している。たとえば, 心理的な残忍性を告発するため, あるジャマイカの住人から聞いた話を例示している。この中で, プリーストリーは——ダーウィンがそうであったように——奴隷購買者の行為だけでなく, 奴隷購買者のいる本国の人々もそのような残忍な行為に加担しているとして非難する。

私は, ジャマイカに住んでいるある人物から情報を得た。奴隷たちは売り渡された後, 火や台所用品を見ると身震いすることが普通である。殺されたり食べられたりすることを想像するからである。年長の奴隷がなんらそのようなことがないと彼らに確信させるまではそうなのである。その哀れな被造物は, このようなこと [殺されたり食べられたりするのではないか] を航海の間ずっと, 考え, 苦しんでいるに違いない。また, 連れ去られていない数千のジャマイカ国民たちも, そういう境遇に陥る危険にさらされていることを自覚しているので, 国全体に恐怖が蔓延しているに違いない。これらのことはまったく考慮されていない。そのようなわけで, どんなに奴隷を良く取り扱っても, そうした恐怖心を埋め合わせることはできないのである。 (Priestley 1788, 368)

そのような残忍性の具体的な例として, 奴隷死亡者数をプリーストリーは取り上げる。植民地での強制労働によって亡くなる奴隷だけでなく, 輸送中にも亡くなる奴隷が多数いる。とりわけ, 輸送中に死亡しない奴隷を船上で選りすぐる「選別 seasoning」は, 同じ人間としてプリーストリーにとって耐えがたい行為だったであろう。この事例は, 奴隷制がいかに非人道的かを訴えかける例としては非常に有効なものである。

私たちの砂糖や他の西インド産の商品を作るために, おそらく 50 万人が毎年, 殺されている。それはとりわけ衝撃的な方法で行われている。地震やペストや飢饉によって亡くなることさえ, これらのとても哀れな人々がしばしば死ぬ方法と比較して慈悲深いであろう。ヨーロッパ人のプランテーション全ては, ひとまとめで, 毎年, 6,000 人の新たな奴隷の供給を求めているといわれている。だが,

これらの人々は非常にたくさんの人々が選別と呼ばれるものの後、生き残った人々である。彼らはその前に、屈服させられ労働に耐えるようになると買われるのである。そして、その後、それほどたくさんの人々が航海の間に亡くなるのである。船上での監禁状態や残忍な取り扱いがなされているからである。少なくとも10万人が毎年、アフリカから輸出されているといわれている。またある人は、以前、保護され、安全に船上で生き残る1人のために10人が殺されていると言っている。(Priestley 1788, 370)

たとえ、植民地に生きて着いたとしても、奴隷は主人の「気まぐれ」や恣意に従わねばならない。それゆえに、プリーストリーは、その状態が幸福であるとは考えなかった。プリーストリーにとっては、他人の意思に左右されない自立的かつ自律的な状態がもっとも幸福な状態になる必要条件であった。(これは、すでに強調したように、プリーストリーが自由を最上の価値として強調したことと関係している。) こうした主人の恣意的な奴隷管理による悲惨な状態から奴隷を救済するために、政府の法律による規制が主張される。その結果、法律の管理下に置くということは、主人の「気まぐれ」を政府が管理することになり、奴隷が恣意的な権力にさらされる危険性は激減する。しかしながら、そうであったとしても奴隷は奴隷なのである。

慈悲深い主人の下で、奴隷は、間違いなく、ある程度の幸福を享受するだろう。だが、それでも彼らは奴隷であり、他者の意思、すなわち気まぐれに従わねばならない。そして、法の庇護下に置かれなければもっとも大きな不当行為から適切には守られないのである。(Priestley 1788, 367)

また、プリーストリーは、奴隷制が主人の権

力の乱用を引き起こしていることを告発する。たとえ反乱を起こしたとしても主人は何らかの力で奴隷たちを制圧してしまうし、そうなれば彼らの生命は危険に晒されてしまう。生きるも地獄、死ぬも地獄というわけである。

概して、私たちのプランテーションでは、奴隷はたいへん長時間、日曜を除く毎日、主人のために働かされているので、彼らが自分たちのために自由に使えるのはたった1日しかなく、ほとんど寝る時間もないと言われている。労働における怠惰さがあれば彼らは激しく打ちのめされるし、反乱(いわゆる、彼らの自由を回復するあらゆる試み)をおこせば、彼らはたいてい生きてまますらし者にされてしまう。(Priestley 1788, 371)<sup>21)</sup>

これらの主人の残忍性や権力乱用はイングランドにおいてとりわけ深刻であるとプリーストリーは見ている。フランスの奴隷の取り扱いに関するプリーストリーの見解は、スミスの見解に非常に近いものである。

イングランド人と同じくらい残忍な方法で奴隷を使用しているヨーロッパ人は他にはいない。スペイン人は利益となるような素晴らしい規制を設けている。その結果、奴隷は自分たちの自由を作り上げることができる。フランス政府もまたまさにこの目的にかなうような法規則で干渉している。だが、イングランドに属している奴隷は、概して、彼らの主人の恣意に委ねられる。彼らの毎年の消耗ということ自体が、もっとも残忍な使用の証拠である。(Priestley 1788, 372)

また、プリーストリーは奴隷の中でもとりわけ女性を取り上げ、家族との関係から論じる。プリーストリーにとっては、奴隷制は女性を非人間的に取り扱うため、道徳的に墮落させ、家

族関係を破壊するものであった<sup>22)</sup>。そのような奴隷制は、道徳的に荒廃した人以外は受け入れることが困難だろうとプリーストリーは考えていた。

航海の間に、船上や売り場で女性がさせられる衝撃的なほどみだらな活動や、もっとも近い親族と友人、夫と妻、両親と子どもの分離は、この取引に慣れている人以外の全ての人にとって恐ろしく聞こえるだろう。(Priestley 1788, 371-72)

また、このような道徳的退廃は、主人にも当てはまる。主人が行使する権力は、彼らと同じように道徳的に荒廃させていくのである。この荒廃は、彼らにとってだけでなく、社会全体にとっても不利益なのである。

主人が奴隷に行使している権力は、必然的に、彼を傲慢、残忍、気まぐれにする傾向をもっている。その傾向は、人々がもっとも幸福な状態である平等の社会に不適合である。(Priestley 1788, 380)

プリーストリーにとってこの「平等」が財産の平等を意味していないことは明らかである。プリーストリーの議論の特徴は、この「平等」をめぐる議論にも表れる。このような「平等」の考えは、人間は生まれながらに平等の権利を持つというロックの自然権の教義を忠実に継承している証左でもある<sup>23)</sup>。

プリーストリーによれば、「人は卓越した内省力を持っている」(Priestley 1788, 379)のである。このような「内省力」は、「隷属の状態におかれたとき、かれを惨めな」境遇にしてしまう。黒人奴隷の大多数が、「精神の激しい苦痛」を持ちながらその生涯を終えている状況は異常である(379)。彼らは死ぬときになって初めて「精神の激しい苦痛」を味わなくてもすむよう

になり、精神の平静を得ることができるのである。プリーストリーは当然、イングランド人をはじめとした白人が、黒人よりも優れているとは考えなかった。アフリカ人をヨーロッパ人と同等の知的な存在とみなしていた。それゆえ、彼らは等しく扱われなければならない。彼らだけが残忍に取り扱われ、知能の発達が妨げられているのは許されないことである。いかなる人間であっても「平等」に取り扱われなければならないとプリーストリーは考えていたのであった。このような見解は、ダーウィンの見解にはほぼ近いものであるということが出来る。

## VI 『説教』におけるプリーストリーの 見解(2)——経済的見解——

奴隷廃止論による経済的な結果をめぐる、プリーストリーは、二つの議論を取り上げる。(i)「もし私たちが奴隷貿易を放棄すれば、私たちは国家の利益の価値ある源泉を放棄し、ライバルにそれを与えることになるという人がいる」(Priestley 1788, 382)。(ii)「もし奴隷制が廃止されれば、今、奴隷によって作り上げられている砂糖や西インド諸島の他の生産物を私たちはどのように手に入ればよいのかと言う人がいるだろう」(Priestley 1788, 382)。

議論(i)に対して、プリーストリーは奴隷貿易そのものがそもそも「邪悪であり、不法である」。それゆえに、そのような貿易から引き出された「利益は正当化されない」と論じる。奴隷は解放され、自国で生産活動を行うべきであり、イングランド人はイングランドで生産活動を行うべきである。そして、生産物を各々の国家が交換すればよいのである。それゆえに、どちらが勝者か敗者かは関係がない。プリーストリーは国際分業を行い、互惠的な自由貿易により世界の各々の国富が増加していくと考えていた。だから、「この国[イングランド]の製造業者たちは、全体的にシステムの変更から非常に大きな利益を見出すだろうし、彼らのだれ

もが敗者とはならないであろう」(Priestley 1788, 382) と論じる。

議論 (ii) に対しては、まず、「正義をなし、慈悲を示すことが私たちの最初の関心事である」(Priestley 1788, 382-83) とプリーストリーは論じ、経済的な問題よりも人道的な問題のほうにプライオリティーがあることを提示する。ここでも人道的立場からプリーストリーは、奴隷を解放し、人間として対等に扱うべきであるという主張を繰り返している。しかしながら、このような倫理的・人道的主張を繰り返しても奴隷制や奴隷貿易を廃止する現実的な対策としては不十分である。それゆえ、プリーストリーはスミスの議論を取り入れながら、奴隷廃止の経済的なメリットが存在することを楽観的ではあるが、論理的、説得的に論じようとしたのである。

現状では、奴隷が奢侈品（プリーストリーは砂糖を想定している）を生産しているので比較的安価であるが、奴隷制を廃止すれば、奢侈品の価格は上昇する。だから、金持ちはそれらを購入できるが、貧乏人は購入することができなくなる。しかしながら、奴隷制や奴隷貿易を廃止すれば、アフリカ人は「自由人 freeman」として労働するようになる。そうすれば、アフリカ人は自分たちの手で奢侈品を製造するようになり、貿易を通して、奢侈品の供給は増え、価格はもとの水準に戻るか以前よりも低価格になる。このような具体例としてプリーストリーはアメリカ・ペンシルヴェニアのクエーカー教徒が黒人奴隷を解放した例を挙げる。これは、奴隷解放運動において非常に有名な話であり、すでに論じたように、スミスも同様の例を示している。

この二つの議論から以下の二点がわかる。(1) 奴隷制度や奴隷貿易は不正義で許されるものではなく、奴隷は解放されるべきであるということ、(2) 奴隷を解放しても商品市場における供給は今までと変わらない水準ないし、それ以上

の水準へと移行し、富は増加する、ということである。ここには明らかにスミスの分業と市場の関係を見て取ることができる。市場が拡大すればするほど、分業もまた促進されるというスミスのテーゼをプリーストリーは積極的に受容していた。さらに、国内の社会的分業の進展がそのまま国際分業につながるというスミスの視点をプリーストリーも共有していた<sup>24)</sup>。最初にも論じたように、プリーストリーが『講義』の序でスミスの『国富論』に言及し、「たかさんの価値ある項目」を付け加えたと評価していた意味は、上の考察でその一端が明らかとなったように思われる<sup>25)</sup>。

## VII 奴隷解放後の世界

### ——結びにかえて——

プリーストリーにとって、奴隷制はあくまでも悪であったのだが、他の奴隷解放論者と同じように、奴隷の即時解放には躊躇せざるを得なかった。なぜなら、「長期間、奴隷であった人々は、自由 freedom の適切な使用法を知らないだろう」からである。そこで、奴隷制を廃止する前に、奴隷貿易の停止を行い、奴隷所有者の寛大さに期待したのである。あくまでもプリーストリーが主張したのはスミスと同様に漸進的な廃止であった。それは、結果的には、奴隷にとっても奴隷所有者にとっても利益になるとプリーストリーは考えたのである<sup>26)</sup>。

プリーストリーは奴隷制や奴隷貿易を悪とみなし、その悪を廃絶しなければならないと考えた。それは地球を平和と幸福の状態へと、そして、「徐々に完成へともたらず」ものなのである。人類を尊重することができるのは人だけである。正しい行為を行い、幸福の状態へと接近し、栄光と幸福に満ちた楽園へと人々をもたらず。そのような楽園状態に達するためには奴隷の解放はなくてはならないものなのであった<sup>27)</sup>。

しかしながら、プリーストリーは奴隷が解放された後、生活をどのように保証するのかと

いった論点をもっていない。彼にとっては奴隷という悪をどのように乗り越え、駆逐するかが問題であった。プリーストリーは奴隷の廃止によって世界が楽園状態に達するにちがいないという過度の楽観的傾向をもっていたし、あらゆる人物の道徳的退廃を防ぎ、個々人が人格を完成させていくためには、恣意的な束縛のない自由な状態に人を置いておくことがもっともよいと考えていた。それゆえ、そのような生活保障の問題もまた、個々人が自由に能力を発揮することによって乗り越えることができると考えていたのである。

松本哲人

### 注

- 1) 化学史からのプリーストリー研究としては、日本において河野俊哉の一連の研究がある（河野 2005 a, 2005 b, 2006 など）。また、海外では最近でも Johnson (2009) などが出版されている。
- 2) 本稿は Dick (2005) の見解とほぼ同じである。だが、Dick は『講義』に言及していないし、ミスとプリーストリーの関連性を論じていない。
- 3) Robbins (1959) は、プリーストリーを「自由 liberty」と「完成 perfection」を指向した思想家と評価している。他方、Kramnick (1990) は、プリーストリーの自由主義的傾向に着目し、ロック的な「自然権的自由主義 natural rights liberalism」とベンサム的な「功利主義的自由主義 utilitarian liberalism」という二つの思想を両立させようとしたプリーストリー像を提示している。
- 4) その典型は、Stephen (1876, 1: 431 / 訳(中) 133) にみられる。「プリーストリーの思弁からなんらかの説得力と獨創性を期待することは難しい。せいぜいのところ彼は自分の属する時代と階級の思想を手っ取り早く映す鏡であり、相抗争する自然力の嵐の中の一時的避難先となる程度には充分安定感のある理論を性急に作り上げることにかけての達人であった。」とはいえ、

そのような評価ばかりではなかったことも当然事実である。その中でもとりわけ杉山忠平の一連のプリーストリー研究は特筆に値するだろう。杉山 (1974) は、「理性と革命の時代」を生きたもっとも典型的な人物としてプリーストリーを位置づけ、理性と自由をその生涯を通して重視したことを明らかにしている。

- 5) プリーストリーはその中でミスだけではなく、ジェイムズ・ステュアート (James Steuart, 1712-1780) の名前も挙げているが、本論とは直接的に関係がないので取り上げない。当然ながら、そのことはプリーストリーの知見がステュアートから何ら影響を受けていないということの意味していない。プリーストリーがステュアートから何を学び、どのようにステュアートの議論を豊饒化させたのかは今後の課題となる。また、奴隷貿易問題は、植民地経営の問題との関連からも論じることができるであろう。それもまた今後の課題となる。
- 6) しかしながら、Davis (1975) が明らかにしているように、奴隷制および奴隷貿易に反対の論陣を張った人びとはイングランド内外を問わず多数、存在した。田中 (2002) が指摘するように、18 世紀の啓蒙思想は、「人間存在の条件にとって最も過酷というほかない奴隷という境遇を、初めて批判の俎上に乗せた」(62) ののである。また、フランス思想史における奴隷制批判の側面を考察した研究として安藤 (2007) がある。
- 7) 本節は、Williams (1944)、Ryden (2009)、市橋 (1989)、池本他 (1995)、川北 (1996) を参照した。
- 8) 「10 パーセント法」という。「王立アフリカ会社が砦や商館の維持・管理の責任を果たすため、その費用を、かつてのもぐり商人、いまや自由貿易商人の 10 パーセント輸出関税で賄うことになった。」(池本他 1995, 140)
- 9) その後 1713 年に王立アフリカ会社はその役割を終え、自由な奴隷貿易により拍車がかかった。
- 10) その背景としては、砂糖の需要が高いにもかかわらず、糖蜜法や砂糖法といったさまざまな砂糖に対する保護政策により、砂糖の価格が高

- いままであったことなどを挙げるができる。
- 11) 本稿では、砂糖を中心に扱ったが、当然、奴隷により生産されたのは砂糖だけではなく。例えば、タバコやラム酒などを挙げるができる。
  - 12) 当時の奴隷制の擁護者としてはリチャード・ニスベット (Richard Nisbet) がよく知られている。彼は、農作物プランテーションの生産量を維持し、さらなる増産のために奴隷の輸入や使用を正当化する主張を展開した。
  - 13) しかしながら、厳密には、イングランド国教会、福音主義者、メソヂストと理神論者、ユニタリアンでは、人間に対して抱いていた観念が異なる。今井 (2009) によれば、前者の平等とはあくまでも「垂直序列」であったのに対し、後者は「万民を平等に救う普遍的な慈悲」を信条としていた。近代ユニタリアンの始祖であるプリーストリーの (後に考察を加える) 平等の考え方もこのような点に由来することは明らかである。
  - 14) ルナ協会全般については、Schofield (1963) および (2004, 147-68), Bolton (1888), ダーウィンについては、King-Hele (1977) および松永 (2009), ワット, ダーウィン, スモールの関係およびボルトンについては、Crowther (1962) のジェイムズ・ワットの項, リチャード・ラヴェル・エッジワースについては、上宮 (2008) を参照。本論のダーウィンについての説明は、その多くを King-Hele (1977) に負っている。
  - 15) スミスのハチスン批判については Raphael (2007) の第5章も参照。
  - 16) このようにイングランドにおいても奴隷を管理する法律を制定しようと奔走したのがエドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729/30-1797) であった。バークは奴隷制を「漸進主義的な改革」——法制化により奴隷貿易のインセンティブを減じ、奴隷制そのものを廃止させるという漸進的改革案——によって廃絶しようとした。以下で見るように、プリーストリーは法規制については肯定的であったが、奴隷制存続の温床となり続ける可能性があるので、全面的な支持を与えなかった。この点においては、バークと同じように「漸進的な改革」を訴えたということもできるだろう。この点において、プリーストリーとバークの考えは非常に近いように思われる。バークの奴隷制批判については、Burke (1780) およびその優れた解説として岸本 (2000) を参照。
  - 17) Crook (1966) の調査に従えば、英語圏だけでなく、オランダ語訳やフランス語訳もそれぞれ 1793 年, 1798 年に出版された。
  - 18) この点に関しては、杉山 (1979) も参照。
  - 19) プリーストリーが、『政府の第一原理』において、以下のように論じているのは、特筆すべきことであるだろう。「なんであっても、成長の過程にあるものに自由を与えれば与えるほど、そのものはそれだけ完全なものとなるだろうということ、普遍性を持った格言である (Priestley 1768, 123).」当然のことながら、ここで言う自由は「エゴイズムの自由」ではなく、不合理な「伝統的束縛」からの解放を意味する。このような「自由」をめぐる二つの議論については、大塚 (1968) を参照。
  - 20) 本書は「説教」とタイトルについているように、1788 年 1 月 23 日、バーミンガムで行われた「奴隷貿易廃止通信協会」での説教をもとに、加筆・修正し、出版された。しかしながら、序文において、プリーストリーはこれが「論説」であるとはっきり明記している。
  - 21) しかしながら、プリーストリーは法律をどのように制定するかといった具体的な対策については論じない。この点は、バークとは決定的に異なる。
  - 22) プリーストリーは家族の存在を様々な意味で重要視していた。とりわけ成人男性が家族を持つことは、将来に対する思慮——無為や怠惰、浪費癖などがあれば、家族が生活に困るといったような先見の明——を育むために必要であると彼は論じる。Priestley (1772-74) を参照。
  - 23) このような自然権の概念を持ち出し、すべての人間の権利の平等を訴えるやり方は当時の急進主義者たちの特徴であるが、プリーストリーは後に見るように極めて漸進的な改良を主張

し、即時の抜本的改革を主張しない。この点は、プリーストリーの思想の特徴でもある。

- 24) この点に関しては服部(1999, 第3章)を参照。
- 25) しかしながら、プリーストリーとスミスでは人間本性理解に若干の違いがある。スミスは、人間本性を利己心に見出し、経済原理もまた利己心を出発点として説明していた。他方、プリーストリーは、彼の人道的見解からも明らかなように利他心に立脚しており、利己心に関しては限定的に述べられるにとどまっていた。プリーストリーが容認した利己心は、あくまでも他者に対して良い行いをしようと意図されたときには是認される。それは、見返りを求めるという意味ではなく、あくまでも他者に対して善行をなすことが人間としての当然の原理だからである。プリーストリーにとって利己心とは、「悪徳と徳の間」にあり、「高次で、…有徳で賞賛に値するものへと私たちを引き上げる手段」(Priestley 1772-74, 38-39)なのである。それゆえに、当然ながら、自己の金銭欲を満たすための投機——現代的な用語では「マネーゲーム」と称されるような投機——による利得の獲得などは否定される。
- 26) このような見解はトマス・ペイン(Thomas Paine, 1737-1809)のそれと非常に類似している。ペインもまた、奴隷の即時解放ではなく、最初は自由人にしたあとでも「ほどよい地代」で彼らに土地を与え、蓄財が可能なように配慮すべきであると考えていた。Paine(1775)を参照。また、ペインとベンジャミン・ラッシュ(Benjamin Rush, 1745-1813)の反奴隷貿易論を考察した最近の研究として高橋(2010)を挙げることができる。
- 27) プリーストリーの恒久的平和論についてはPriestley(1789)も参照(特に第14章)。その中でプリーストリーは、フランス革命を支持しながら、革命は神から与えられた理性を適切に行使した結果であると論じている。彼は、もし理性を世界が支配すれば、戦争はなくなり、世界は平和になることができると信じていた。

## 参考文献

- Bolton, Carrington. 1888. The Lunar Society or the Festive Philosophers of Birmingham One Hundred Years Ago. In *Scientific Correspondence of Joseph Priestley*, edited by Carrington Bolton, Appendix II, 1892 (rep. 1969). New York: Privately Printed (Kraus Reprint).
- Burke, Edmund. 1780. *Sketch of the Negro Code*. In *Select Works of Edmund Burke*. Indianapolis: Liberty Fund, 1999. vol. 4.
- Crook, Ronald E. 1966. *A Bibliography of Joseph Priestley 1733-1804*. London: Library Association.
- Crowther, J. G. 1962. *Scientists of the Industrial Revolution*. London: Cresset Press. 『産業革命期の科学者たち』(抄訳) 鎮目恭夫訳, 岩波書店, 1964.
- Darwin, Erasmus. 1789. *The Botanic Garden: Poem, in Two Parts. Part I. Containing the Economy of Vegetation. Part II. The Loves of the Plants: With Philosophical Notes*. (<http://www.archive.org/details/thebotanicgarden00darwich>)
- Davis, David B. 1975. *The Problem of Slavery in the Age of Revolution 1770-1823*. Ithaca, NY: Cornell Univ. Press.
- Dick, Malcolm. 2005. Joseph Priestley: The Lunar Society and Anti-Slavery. In *Joseph Priestley and Birmingham*, edited by Malcolm Dick. Studley: Brewin Books.
- Gill, Michael B. 2006. *The British Moralists on Human Nature and the Birth of Secular Ethics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hutcheson, Francis. 1755. *A System of Moral Philosophy, in Three Books*, Vol. II. (<http://www.archive.org/details/systemofmoralphi02hute>)
- Johnson, Steven. 2009. *The Invention of Air: An Experiment, a Journey, a New Country and the Amazing Force of Scientific Discovery*. London: Penguin.
- King-Hele, Desmond 1977. *Doctor of Revolution: The Life and Genius of Erasmus Darwin*. London: Faber & Faber. 『エラズマス・ダーウィン』和田芳久訳, 工作舎, 1993.
- Kramnick, Issac. 1990. *Republicanism and Bourgeois Radicalism: Political Ideology in Late Eighteenth-Century England and America*. Ithaca, NY: Cornell Univ. Press.
- Mill, John Stuart. [1848] 1963-91. *Principles of Politi-*

- cal Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*. In *Collected Works of John Stuart Mill*, edited by J. M. Robson. Toronto: Univ. of Toronto Press, London: Routledge and Kegan Paul, vol. 2-3. 末永茂喜訳『経済学原理 (全五分冊)』岩波文庫, 1959-1963.
- Paine, Thomas. [1775] 1987. *African Slavery in America*. In *The Thomas Paine Reader*, edited by Michael Foot and Issac Kramnick. London: Penguin Classics.
- Priestley, Joseph. 1768. *An Essay on the First Principles of Government*, 2nd ed. 1771. In *Theological and Miscellaneous Works of Joseph Priestley*, edited with notes by J. T. Rutt. Bristol: Thoemmes Press, 1999, vol. 22.
- . 1772-74. *Institutes of Natural and Revealed Religion*, the Edition of 1782. In *ibid.*, vol. 2.
- . 1788. *A Sermon on the Subject of the Slave Trade*. In *ibid.*, vol. 15.
- . 1789. *Letters to the Right Honourable Edmund Burke, Occasioned by his Reflections on the Revolution in France*, 3rd ed. 1791. In *ibid.*, vol. 22.
- . 1803. *Lectures on History, and General Policy*. In *ibid.*, vol. 24.
- . 1832. *Life and Correspondence, 1787-1804*. In *ibid.*, vol. 1, part 2.
- Raphael, D. D. 2007. *The Impartial Spectator: Adam Smith's Moral Philosophy*. Oxford: Oxford Univ. Press. 生越利昭・松本哲人訳『アダム・スミスの道徳哲学—公平な観察者』昭和堂, 2009.
- Robbins, Caroline. 1959. *The Eighteenth-Century Commonwealthman: Studies in the Transmission, Development and Circumstance of English Liberal Thought from the Restoration of Charles II until the War with the Thirteen Colonies*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press.
- Ryden, David Beck. 2009. *West Indian Slavery and British Abolition, 1783-1807*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Schofield, Robert E. 1963. *The Lunar Society of Birmingham: A Social History of Provincial Science and Industry in Eighteenth-Century England*. Oxford: Clarendon Press.
- . 2004. *The Enlightened Joseph Priestley: A Study of His Life and Work from 1773 to 1804*. University Park, Pa: Pennsylvania State Univ. Press.
- Smith, Adam. 1759. *The Theory of Moral Sentiments* (6th ed., 1790), the Glasgow Edition, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie. Oxford Clarendon Press, 1976; corrected reprint, 1991. 水田洋訳『道徳感情論 (上) (下)』岩波文庫, 2003.
- . 1776. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (3rd ed., 1784), the Glasgow Edition, edited by R. H. Campbell, A. S. Skinner, and W. B. Todd. Oxford: Clarendon Press, 1976. 水田洋監訳, 杉山忠平訳『国富論 (全四分冊)』岩波文庫, 2000-01.
- . 1978 a. *Lectures on Jurisprudence*, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael, and P. G. Stein. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『法学講義』岩波文庫, 2005.
- . 1978 b. Early Draft of Part of *The Wealth of Nations*. In *Lectures on Jurisprudence*, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael, and P. G. Stein. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『国富論草稿』『法学講義』所収, 岩波文庫, 2005.
- Stephen, Leslie. 1876. *The History of English Thought in the Eighteenth Century*. London: Smith, Elder. (<http://www.archive.org/details/historyofenglish-01stepiala>) 中野好之訳『十八世紀イギリス思想史』筑摩書房: 筑摩叢書 (上) (中) (下), 1969-70.
- Williams, Eric. 1944. *Capitalism and Slavery*. Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press. 『資本主義と奴隷制』山本伸監訳, 明石書店, 2004.
- 安藤隆穂. 2007. 『フランス自由主義の成立』名古屋大学出版会.
- 池本幸三・布留川正博・下山晃. 1995. 『近代世界と奴隷制—大西洋システムの中で』人文書院.
- 市橋秀夫. 1989. 「イギリス奴隷貿易廃止運動の史的的分析 (1787-1788年)」『三田学会雑誌』81 (4): 142-63.
- 今井裕美. 2009. 「『苦痛』への共感と英国奴隷貿易反対運動」『山形短期大学紀要』41:5-34.
- 上宮智之. 2008. 「F. Y. エッジワースとその知的環境—生誕からトリニティ・カレッジ・ダブリン時代まで」『経済学論究』61 (4): 47-81.
- 大塚久雄. 1968. 「自由主義に先立つもの」『近代化の人間の基礎』筑摩書房.
- 生越利昭. 1991. 『ジョン・ロックの経済思想』晃洋書房.
- 川北 稔. 1996. 「福音主義者の理想と奴隷制の廃止」『英国文化の世紀 1 新帝国の開花』松村昌家他編所収, 研究者出版.

- 岸本広司. 2000. 「付論 バークの奴隷制批判について」『バーク政治思想の展開』所収, 御茶の水書房.
- 河野俊哉. 2005a. 「プリーストリの電気研究」『化学史研究』32 (2): 11-29.
- . 2005b. 「実験哲学としてのプリーストリの化学」『化学史研究』32 (4): 201-16.
- . 2006. 「プリーストリにおける『歴史』と『実験哲学』 — 『歴史家』から『実験家』へ」『化学史研究』33 (3): 147-60.
- 杉山忠平. 1974. 『理性と革命の時代に生きて—J. プリーストリ伝』岩波新書.
- . 1979. 「古典経済学と J. プリーストリ」『経済研究』30 (3): 193-203.
- 高橋貴之. 2010. 「アメリカ独立前夜の反奴隷貿易論—『特権』から『権利』への自由の変質」『経済科学』58 (1): 71-87.
- 田中秀夫. 2002. 『社会の学問の革新—自然法思想から社会科学へ』ナカニシヤ出版.
- 服部正治. 1999. 『自由と保護—イギリス通商政策論史』ナカニシヤ出版.
- 松永俊男. 2009. 『チャールズ・ダーウィンの生涯—進化論を生んだジェントルマンの社会』朝日新聞出版.
- 松本哲人. 2009. 「神学的功利主義の二類型—W. ペイリーと J. プリーストリ—」『マルサス学会年報』18:1-30.

## Joseph Priestley's Debates on Anti-slavery

Akihito Matsumoto

This paper aims to discuss Joseph Priestley's argument regarding antislavery and compare his contention with those of Erasmus Darwin and Adam Smith. Eighteenth-century England witnessed numerous arguments over antislavery.

Joseph Priestley, known as a prolific writer, also wrote a remarkable book on antislavery, *A Sermon of the Slave Trade* (1788), hereafter *SST*. The book, however, has not gained prominence. Priestley's argument regarding antislavery also featured in his *Lectures on History and General Policy* (1788, hereafter *LH*). He gave lectures on history, language and grammar, and law and politics at the Warrington Academy from 1761 to 1767 and organized and published them later. In the book, Priestley divided his discussions on slavery on the basis of two aspects, humanitarian and economic, and discussed them briefly. Priestley discussed slavery in great detail in *SST*.

The humanitarian discussions were previ-

ously conducted by Darwin. He appealed to the benevolence implanted in human nature. Although Priestley did not directly refer to Darwin, their arguments were rather similar. With regard to the economic discussions, Priestley said that he read Smith's *Wealth of Nations* (1776), wherein he discovered certain general principles illustrated by Smith. Priestley learned considerably from Smith and was inspired by him. Moreover, Priestley's antislavery debates were influenced by Smith's arguments.

Both the humanitarian and economic characteristics of Priestley's argument coexisted in his books, whether *LH* or *SST*. Therefore, Priestley considered not only the economic aspects discussed by Smith but also the humanitarian (or ethical) aspects, which continued to feature in the mainstream after Hutcheson advocated them. Smith had not discussed the latter aspect.

JEL classification numbers: B 12, B 31.